

巻 頭 言

秋田大学 臨床心理相談室室長
教授 高 田 知恵子

2011年3月11日14時46分。この日時を私たちは決して忘れないでしょう。この大震災で犠牲になられた方への哀悼の意と被害に遭われた方へのお見舞いをまず申し上げたいと思います。

この地震が起きた時、いつに無く強く長い揺れに私たちは当惑しました。ほどなく停電となり、余震の続くなか皆が暗い一夜を過ごしました。翌日、徐々に情報が入り、テレビ画面の惨状を見て愕然としました。安否確認の取れない修了生もおり心配しましたが、同級生の懸命の連絡もあり最終的に無事が確認できました。しかし修了生の中には、避難所生活を体験した者、被害に遭いながらも職場で懸命に支援に当たっている者もいます。この紀要に寄稿した修了生の中にも地震・津波に遭い、九死に一生を得た者がいます。そのなかで彼女は懸命に子どもたちや被災者たちをケアしています。このような修了生やその職場、被災者、地域に対して具体的にどのような支援ができるのか、今考えているところです。私どもの危機介入の意志・能力が問われるところだと思います。被災された方々と支援者のニーズを把握することはもちろんですが、支援要請が出る前に私どもの想像力を発揮して積極的に組織的に介入していくことが緊急時には必要でしょう。

これまでも阪神淡路、新潟などの地震の際に臨床心理士会はこころのケアを行ってきました。学校の緊急支援も行ってきました。これまでのノウハウだけでは間に合わないこともあるかも知れません。今回の事態から学ぶことは膨大だと思います。これほど広範囲の被災ですから、多くの方たちが当事者になったと言えます。支援する立場、支援される立場と分けることはできないでしょう。当事者意識を持ちながら、当事者同士で支援するということになるでしょう。「今、ここで」の意味が迫ってくる思いです。

今回の未曾有の被害から日本を復興させるためには長い時間と努力と忍耐が必要だと思われまます。その基盤になるこころを支える臨床心理士の役割は今後さらに大きくなると思います。私どもはそれに向け、さらに研鑽を積む必要があります。

さて、秋田大学臨床心理相談室は平成22年（2010年）4月から教員を新たに迎え、教員5人体制で事業を進めております。相談室内の整備も徐々に進めて、来談の皆様にも少しでも快適な環境で過ごしていただけるよう努力しております。

また、11月には日本ブリーフサイコセラピー学会を秋田大学で開催することが決まりました。秋田において実りある大会を全国の皆様にも体験していただけるよう、心理学研究室全員で準備を進めております。今後も秋田大学臨床心理相談室を見守っていただくようお願いいたします。